

古美術桃青が古美術専門誌『目の眼』2007年3月号の第2特集「織部を語り志野をきく」の中で紹介されました(4ページ分)。当店所蔵の志野・織部の一部が掲載されておりますので、ご覧ください。いずれも桃山時代の作品です。

店主

* なお、商品についてのお問い合わせは、下記の電話またはメールでお願いします。

<電話> 03-3571-1233

<メール> ginzatosei@gmail.com

古美術・工芸のところにふれる

目の眼

Me no Me

3

2007

特集◎

志野と織部

その文様を読み解く

特集◎逸品探訪 志野・織部編

好評新連載◎楽に盛る





織部碗形茶碗 銘 鳴海

二、古美術 桃青（銀座）
 次に訪ねたのは銀座七丁目にある「桃青」。銀座にはさまざまな店があるが、七丁目界隈は美術商や画廊が多い。ご主人の富永さんはコレクター出身。だからこそ初心者に優しいし、コレクター好みの品々が並んでいるときいた。店内に設えられた茶室で、コレクシ



鳴海織部鉢

中国古美術

萬里繪

取扱い品

中国古陶磁 印材 玉石



鍍金銅製仏像 高8.2cm 北齊

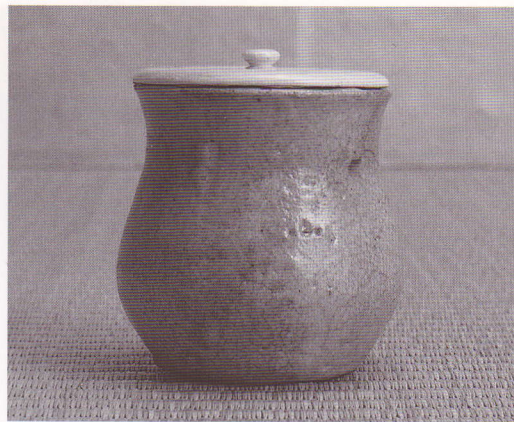
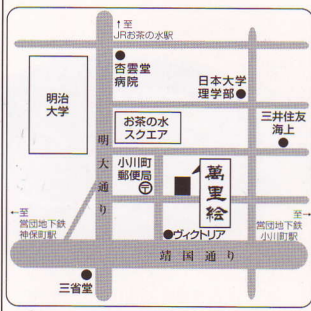
〒101-0052

東京都千代田区神田小川町3-24-1
お茶の水デュープレックス1F-1号
TEL/FAX:03-3295-7119

営業時間 A.M.11:00~P.M.7:00

水曜日定休

駅から徒歩5分



風情を残した作品といえる。
一つの茶碗を手にして、次々と想念が沸き上がってくる。楽しい。
今回は志野と織部のなかでも、初期の風情を持つものと、盛期の洗練された風情を持つものを見せていただいた。
「鳴海といえば鳴海織部ですが、この鉢（九三頁下）は見事な鳴海手ですよ。赤土と白土を斜めに繋ぐというデザインは、桃山工芸の特徴ですね。でもこの鉢の一番の見所は見込みの緑釉なんです。深い緑でしょう」

これは素敵ですね、と答えると富永さんは大きな瓦（九六頁）を見せてくれた。一面の深い緑釉だが、ところどころムラがあって、まるで深海をのぞくようだ。そして中心近くにほのかな鶉の斑が浮いている。後世の、いわゆる織部敷瓦とは一線を画した存在感がある。富永さんは鳴海手の鉢と並べつつ「これは茶道具として焼かれた瓦じゃなくて、どこかの伽藍を飾っていた織部瓦だと思っ

顔で話してくれた。

左：鼠志野替茶器
武者小路千家10代有隣斎箱



織部幾何学文二耳壺

ヨンを見せていただいた。
まず登場したのが珍しい織部の椀形茶碗（九三頁上）。見込みをのぞくと緑釉のあいだを二羽の千鳥が飛んでいる。
「千鳥のほかには小さな幾何学文がい

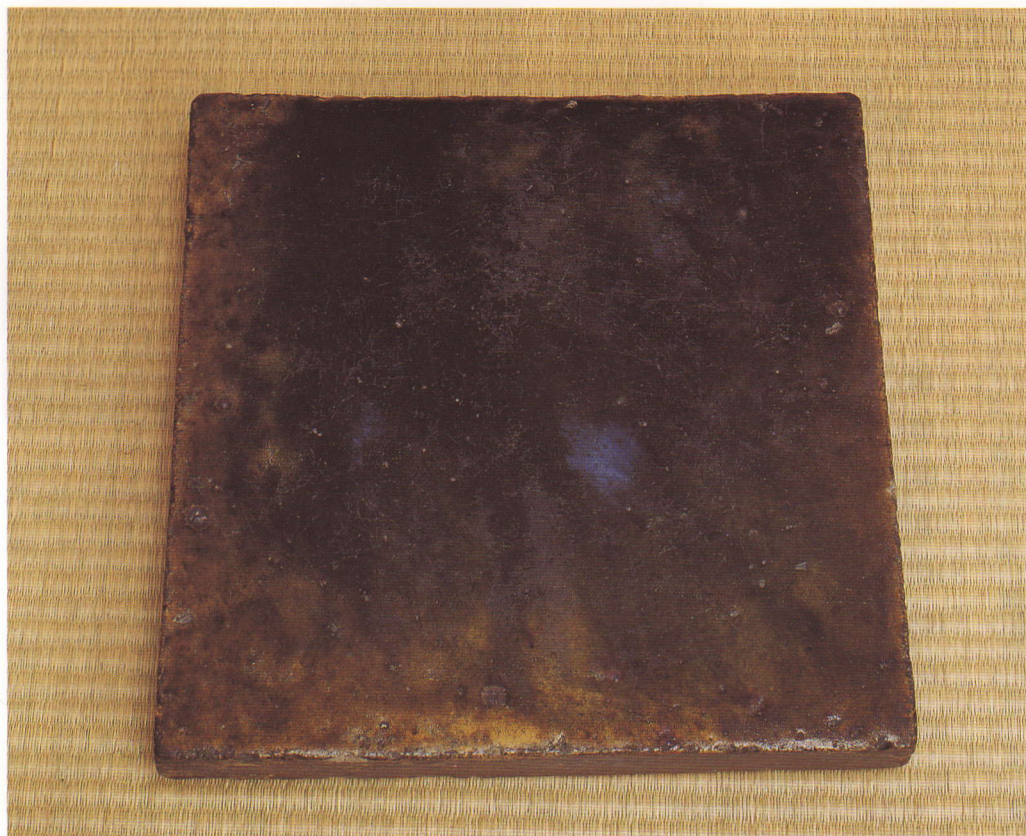


練込志野輪花形台鉢

く、男っぽいですね。初期の織部はこういう風情だったのではないでしょう。か。鳴海」といふ銘がついています」とご主人がほれほれとした顔で語り、手に持たせてくれる。たしかに薄く、軽い。肌触りとしては粉引に近い感触だろうか。織部も最初



志野沢瀉文額皿



総織部敷瓦



左：志野草文平碗 右：紅志野平碗 原三溪旧蔵

◆古美術山ノ井

東京都府中市栄町2-21-3-101

TEL 042-335-6554

◆古美術桃青

東京都中央区銀座7-10-8

第五太陽ビル1階

TEL 03-3571-1233